

橿原市図書館ボランティアの会 ボランティアだより

第3号

発行日 2018年3月7日

発行 橿原市図書館

ボランティアの会

橿原市図書館ボランティアの会発足10周年

平成19年の秋、市立図書館が図書修理と絵本の読み聞かせボランティアを募集され、応募した本が好き、子どもが好きという図書館ユーザーが二十数名、修理班、読み聞かせ班に分かれて活動を始めました。以来10年、ブックスタート班も増設され、今では約50名が登録する図書館大応援団となりました。

読み聞かせ班では、今年の夏、もっと子どもたちに本の楽しさを知ってもらえるように、図書館を利用してもらうようにと、「おはなしピアノライブ」というイベントを、図書館のご協力を得て開催しました。音楽が絵本や詩・物語の世界の道案内となり、子どもたちを夢のような世界に連れていく、そんなことをイメージし、奈良在住のピアニストで作曲家の榊原明子さんにピアノ演奏をお願いしました。初めての試みであり、初めての大きなイベントでしたが、メンバーは早くから集まって会場の飾りつけとリハーサルを頑張りました。予想をはるかに超える約200名もの方にご来場いただき、並べた椅子が全然足りずに立ち見をしていただくという事態となり、正に嬉しい悲鳴。ご来場の皆様、本当にありがとうございました。

絵本「うみやまがっせん」を熟演！



子どもたちの表情、どうでしょう！

榊原明子さん、素晴らしいピアノ演奏、ありがとうございました！



〈修理班〉

修理班は、秋の図書館イベント、マイブックのブックコート体験の際に修理実演をさせていただきました。

本が大好きな人にとっては、特に大切にしている本をできるだけ綺麗な状態で保存したいというのは当然ですが、図書館の本のように自分でブックコートができたなら嬉しいですね。また、小学校などで図書の修理ボランティアをされている、機会があればしたいと考えておられる方、今後もこのような催しをしていただけるように図書館にお願いしていきますので、皆さんの参加をお願いします。

〈修理班からのお願い〉

本の破損がありましたら、セロハンテープは使わないでください。セロハンテープは経年劣化で茶色く変色してしまい、紙を傷めます。破損があった場合は、そのページに葉等をはさんでいただくか、落丁してしまう恐れがあれば少しだけセロハンテープなどで止めていただき、返却の際にお知らせいただくようお願いいたします。

〈読み聞かせ班活動案内〉

〈図書館おはなし会〉

○毎月第1土曜日 午後3時より 約30分

(対象)概ね3歳~5歳

○毎月第3土曜日 午後3時より 約30分

(対象)小学生以上

○第5土曜日

(対象)どなたでも参加していただけます

〈かしはらナビプラザ〉

○毎月第1日曜日 午前11時より 約45分

(対象)どなたでも参加していただけます

★ご参加をお待ちしております。



〈ブックスタート班〉

ブックスタート班は、市の乳幼児健診(1歳6か月児)のブックスタートのお手伝いをしています。ブックスタートは、赤ちゃんの健やかな成長とご家族のお幸せを願って絵本をプレゼントするという趣旨で行われています。

私たち図書館ボランティアは、図書館の職員さん・子育て支援課の職員さんとともに、絵本の読み聞かせをさせていただいて、プレゼントの趣旨をお伝えし、本の世界の楽しさと、読書の喜びが子どもたちの心の栄養になるということをお話させていただいています。

今の時代、子どもたちは生まれた時から、テレビ、インターネット、スマートフォン等々、あらゆる情報が乱舞する世界に生きています。保護者の方も同様です。

スマートフォンが登場して20年、その所有率は今や国民の約8割に上っています。子どもも大人もスマートフォンへの依存が問題になっていますが、子どもたちにどのような影響が出るのか、はかり知れません。

だからこそ、このブックスタートで、赤ちゃんと保護者に、人間の成長にとって、人と人とのふれあい、人の声のぬくもりがいかに大切かということをお話するという大きな意味があると思っています。

今後とも市の子育て支援・子どもの健全育成のための重要施策として是非継続をお願いしたいです



私の思い出の1冊



各自の読書体験の中で、また、ボランティアとして活動してきた中で、思い出に残る1冊を紹介します。

「おはぎちゃん」

やぎたみこ／作（偕成社）

おじいさんの手から転がったおはぎの赤ちゃんが、カナヘビ夫婦や庭の様々な生き物たちに見守られ育っていく、ほのぼのとしたお話です。

老夫婦の姿はレトロ調でどこか懐かしく、生き物や植物の描写は季節感があり、とても美しい、毎年お彼岸の頃に思い出す1冊です。

「手紙 親愛なる子供たちへ」

樋口了一／著（角川書店）

差出人不明のまま届いたポルトガル語の詩が訳された本です。

老いた親から子への切ない思いが綴られています。

母を亡くしてから何年間か、この本を開くことができませんでした。

今開いても一つ一つの言葉に胸が詰まります。各ページの写真もとても美しく、心に深く残っている大切な1冊です。（A・I）

「どんぐりのき」

亀岡亜希子／作（PHP 研究所）

図書館ボランティアに参加して最初に読んだ絵本です。どんぐりの木の寂しくて頑なな心が、やさしいリスによって暖かくほぐされていくところが好きです。

（K・U）



「ぼうさまになったからす」

松谷みよ子／文 司 修／絵（偕成社）

戦争で村中の男たちが戦場へ行ってしまふと、村からカラスの群れが消えた・・・。

戦争を体験した人の心の重さを感じました。誰も幸せになれないのです・・・。

（T・U）

「星をまく人」

キャリン・パターソン／著（ポプラ社）

アメリカに住む11歳の女の子エンジェルは、わがままで甘えん坊の7歳の弟バーニーの面倒をみている。ほぼ母親がわりだ。母親はいるのだが、母親自身が心身共に自分のことで精一杯で、生活は苦しい。父親は刑務所にもう5年も入っている。大変な家庭環境というわけだ。大人の都合で、どんどん状況は悪くなっていく。その中で、家族のことを大切に思っているエンジェルは、少しでも家族を良い状態にしていこうと考え、行動する。

エンジェルとバーニーが、図書館で本を探す場面があります。二人（といっても主にエンジェル）から相談された図書館員が、きちんと話をきき、二人にそれぞれぴったりの本を選び出してくれ、納得して借りていく・・・本が（それを手渡す大人も含めて）エンジェルの心を支えていく様子が、何とも私には印象的でした。中学生以上に読んでほしい1冊です。

（A・E）

「モチモチの木」

斎藤隆介／文 滝平二郎／絵（岩崎書店）

ボランティアを始めたころ、読み聞かせ班の勉強会でこの絵本の特大版を読まれて、とても感動したのを覚えています。

幼い豆太とやさしいじいさまの心温まる物語。特に見開き一杯に「モチモチの木」に灯がともる場面がとても心に残っています。

（E・T）

「OWL MOON 月夜のみみずく」

ジェイン・ヨール／詩 ジョン・ショーエンハル／絵
工藤直子／訳（偕成社）

作者は、自分も幼いころ経験したみみずく探しに子どもたちを連れていってくれた夫に感謝して、いつかみみずく探しに行く日を迎える孫娘に向けて、この本を書いたそうです。

しーんと静まりかえった冬の夜、父さんと私は森の中へみみずくに会いにでかけました。白い息をはずませながら、暗い森の中を歩きました。月と雪の明かりだけ……。

何と言っても言葉のひとつひとつが生き生きしていてずんずん読み手に伝わってきます。響いてきます。そして想像をより一層ふくらませてくれる絵が素晴らしいのです。

子どもたちの日常は、わくわくドキドキがいっぱいです。初めて出会う生き物、初めて知ることがら……どれもこれもうれしさやおどろきでいっぱいなのです。そんなひとつひとつがとても大切なこと。幼いころのわくわくした経験がとても大切なこと。この絵本は、改めてそんなことを感じさせてくれます。

また、忘れかけていた記憶も、おぼろげなうんと幼いころのわくわくした気持ちが思い出されてくるから不思議です。

たしか、険しい山の間を流れる小さな谷川で、透きとおった水の中の石の上を歩く小さな生き物を見つけた私に、それはさわがにだと教えてくれた母。母がそのさわがにを手ですくって見せてくれた時のわくわくした喜び、それが何処だったのかわからないのに、その小さな谷川の情景が思い出され、その時のわくわくした気持ちまでもが思い出されます。何十年も前のすっかり忘れてしまっていた幼いころのことが、少しずつよみがえってくるから不思議なのです。これも絵本のすばらしさだと思います。 (K・K)

「三びきのやぎのがらがらどん」

マーシャ・ブラウン／絵 瀬田貞二／訳（福音館書店）

息子が小さい時、好きな本で、よく何度もせがまれて読みました。

ノルウェーの昔話の一つで「がらがらどん」という同じ名前をもつ三匹のやぎが餌を求めて出かける話です。一番大きいやぎと橋の下に住んでいるトロル（怪物）との対決には、ドキドキしながら何度も聞いていました。親も一緒に楽しんだ1冊でした。

(M・S)

「やさしいライオン」

やなせたかし／作（岩波新書）

みなしごの小さなライオンと一匹のメス犬とのほかなくも、愛しく情感あふれる一冊、深く心に染み入り、感動したのを今も忘れません。数ある本の中で、何度も読みたい一冊です。

(K・T)

「わたしのいもうと」

松谷みよ子／文 味戸ケイコ／絵（偕成社）

作家、松谷みよ子氏のもとに届いた「わたしのいもうとの話を聞いてください」との手紙に心動かされ、ご自身にも重なる部分もあって、この絵本が生まれたとのこと。

いじめにあって登校を拒否し、頑なに心を閉ざした女の子、家族にさえ口もきかず、振り向きもせず……。閉じこもり黙ってどこかを見ているだけ。

いじめがどんなに人の心を傷つけ、苦しめるのか、短いながらわかりやすい言葉で語りかけてくれています。味戸ケイコ氏の絵も繊細で素晴らしい、多くの子どもたちが手に取ってほしいと思う一冊です。 (H・N)

「細雪」

谷崎潤一郎／著（講談社文庫）

川端康成の「雪国」夏目漱石の「吾輩は猫である」島崎藤村の「夜明け前」とともに、日本の名書き出しと言われている、谷崎潤一郎の「細雪」。

美しい四姉妹の細やかな日々が描かれたストーリーもよいのですが、高校生だった私は、大正末期から昭和初期、大戦前の、一番芸術的にも文化的にも良かったころの日本を感じさせる文章に憧れを感じ、大正生まれだった祖母に、そのころのことを聞くのが大好きでした。

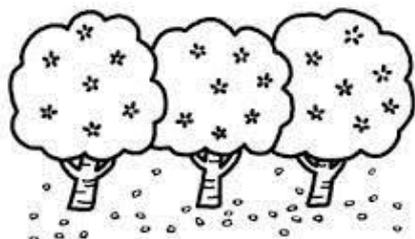
「細雪」は、モダンでお洒落だった祖母と私の大切な思い出の一冊です。 (K・N)

「グリックの冒険」

斎藤惇夫／作 藪内正幸／画（岩波書店）

図書館の読み聞かせボランティアをはじめ、いろいろな絵本に出会いました。一昨年、斎藤惇夫先生の講演会があるので、どんな本を書かれたのかと出会ったのが「グリックの冒険」です。

小学校中・高学年向けの本です。とても読みやすく、どんどん引き込まれていき、気がいたらグリックと一緒に冒険をしているような気分になりました。仲間との出会い、ぶつかりあったり、後悔したり、不安になったり・・・でも最後は自分の決めたことをあきらめずにやり遂げる勇気を感じました。藪内正幸さんの挿絵が素晴らしく、より一層物語に引き込まれました。 (T・N)



「わたし」

谷川俊太郎／文 長新太／絵（福音館書店）

わたしは、山口みち子、5歳。

お兄ちゃんからみると“妹”、お母さんからみると“むすめ”、先生からみると“せいと”、犬からみると“人間”、宇宙人からみると・・・私って、一体誰なんだろう？

あなたが一番好きな、おすすめの本とは問われたら、迷わずにこの「わたし」と答えます。まず、表紙に引きつけられ、谷川俊太郎さんのシンプルな言葉と、長新太さんのシンプルな絵、教示的な文章はもちろん、説明など一切ない、なんと・・・これが子どもの本なのか！と読み終えて、正に感嘆の一言。

以来、絵本について学び、多くの素晴らしい絵本と出会いましたが、私の中ではこれぞ「ザ・良い絵本」ずっと特別な1冊です。

自分とはどういう存在なのか、社会の中の自分、“自分を客観的にみる”ことができると、家族のこと、友だちのこと、学校のこと、社会のこと、きっと様々なことに「気づく」ことができます。それが“生きる力”につながると思うのです。

自立への一歩を踏み出した5～6歳からはもう感じ取れるのではないかと思います。この絵本が、子どもたちの小さな「気づき」の始まりになってほしい、いつもそう願って読んでいます。

「山のむこうは青い海だった」

今江祥智／作 長新太／絵（理論社）

ピンクちゃんとあだなをつけられた気の弱い少年次郎が、尊敬する高杉晋作にならい、決心して一人旅に出かける・・・。

小学校高学年のときに出会い、初めて夢中になった本です。大人になっても、ふと読みたくなり、何度も読み返しては、気持ちがりセットされる気がします。私にとって心のサプリメントとでもいうべき1冊です。 (Y・N)

おすすめ本紹介

<絵本・児童書>

「1つぶのおこめ」 (さんすうのむかしばなし)

デミ／作 さくまゆみこ／訳
(光村教育図書)

(おすすめポイント)

ケチな王様をこらしめるため、ラーニは褒美にお米を所望した。一日目は1粒、二日目は倍の2粒・・・、30日目には、何粒？算数にまつわるインドの昔話。

賢い娘が、1粒のお米からたくさん増やしていく、絵もわかりやすく楽しい絵本です。

「しあわせの石のスープ」

ジョン・J・ミース／作・絵
三木 卓／訳 (フレーベル館)

(おすすめポイント)

度重なる戦争などで、人々の心が疲れきっているある村を三人の僧が訪れる。僧たちがはじめたのは、石のスープを作ること！？

幸せって何だろう？ 子どもは、石のスープって・・・！？大人は幸せについて深く考えさせられます。

「きつねのでんわぼっくす」

戸田和代／作 たかすかずみ／絵
(金の星社)

(おすすめポイント)

子ぎつねを亡くした母ぎつねは山のふもとにある電話ボックスに来る男の子とわが子をだぶらせ、入院中の母親に電話をかける姿をそっと見守ります・・・。

親も子も楽しめる作品だと思いますし、何回読んでも泣きそうになります。

「新十津川物語」(全10巻)

川村たかし／著 (偕成社)

(おすすめポイント)

明治22年、奈良県十津川村で起きた大水害により、多くの村人北海道に移住した。明治・大正・昭和と激動の時代を生き抜く人々の姿を描く。9歳の少女の物語から始まり、時代とともに少女とつながる様々な人々の人生が語られる。そこにはそれぞれの生き方がある。

全10巻ですが、1巻ずつ完結しています。子どもから大人まで読んでいただきたい本です。



<一般書>

「鳥と花の贈りもの」

串田孫一／文 叶内拓哉／写真
(暮らしの手帖社)

(おすすめポイント)

タイトルとカバーイラストの魅力に惹かれ、手に取ったのがこの本です。詩人でもあり哲学者・随筆家でもある串田孫一氏は、「暫くの間、樹木になったような気分で佇む」ことを楽しまれるような方で、この本では、46枚の「花と鳥」の写真の一枚一枚に自然との快い出会いや自然がもたらしてくれる喜びを綴っておられます。

ここ数年来、私が“心を緩めたい”時に、手を伸ばす1冊になっています。

〈編集後記〉

会員それぞれの思い、それぞれのやり方で活動してきた10年。学校や地域、高齢者施設へと活動を広げている人もいますが、基本的には「自分ができることを出きる時に」が本会のモットー。これからも細く長く、図書館を応援していきたいと思っています